

「学習院と文学」

特集

白樺創刊100年記念

2010年は学習院の出身者たちが立ち上げた雑誌『白樺』の創刊100年にあたります。今回はこれら白樺派を起点にしながら、今年没後40年を迎える学習院卒業生の三島由紀夫や、吉村昭なども取り上げ、「学習院と文学」の歩みを振り返ります。



白樺同人と三島由紀夫が過ごした 学習院の日々

大学史料館学芸員 **生田 享子** (いくた きょうこ)

学習院にとっての二つの節目

今からちょうど100年前の明治43年(1910)、『白樺』という雑誌が創刊されました。文学、美術、芸術など多種多彩にわたる作品を掲載、紹介した『白樺』は、芥川龍之介に「武者小路氏が文壇の天窓を開け放つてさわやかな空気を入れたことを愉快に感じたものだつた」(芥川龍之介「あの頃の自分の事」)と評され、

当時の文学界に新風を送る存在として、若者を中心に熱狂的な支持を受けます。

白樺発行の中心的人物であった志賀直哉、武者小路実篤、木下利玄、そして有島武郎・有島生馬・里見弴の有島兄弟、児島喜久雄、柳宗悦など、彼らはいずれも学習院の出身者でした。同窓・同級・血縁の絆で結ばれた同人誌から、これだけの作家や芸術家が輩出された例は、おそらく『白樺』以外には見当たらないのではないのでしょうか。

さらに、本年は三島由紀夫の生誕85年、没後40年でもあります。昭和6年(1931)に初等科へ入学した三島は、高等科卒業までの13年間を学習院で過ごします。三島にとって学習院は出身学校であるとともに、彼の才能を見出した国語教師清水文雄や友人たちとの出会いの場所であり、華族や皇族の子弟が多く通うという特殊性から、創作活動に刺激を与えること

『白樺』創刊号 明治43年
1910)4月 大学史料館蔵



『白樺』第2巻第9号 明治44年
1911)9月 大学史料館蔵





ろでもありました。

白樺同人が過ごした学習院とはどのようなところだったのか、恩師清水文雄と出会い、作家を志すようになった三島由紀夫は、学習院でどのような学生生活を送ったのか、二つの節目を機会に学習院と文学について見つめ直してみたいと思います。

白樺同人が過ごした学習院

『白樺』は、明治43年(1910)4月、有島武郎、志賀直哉、武者小路実篤、木下利玄、^{おだぎ まち、せん かず}正親町公和、^{せん ゆき}児島喜久雄、^{こおひ}里見淳、園池公致、柳宗悦、郡虎彦らによって創刊されました。やがて彼らは、作家、歌人、画家、芸術家とそれぞれの分野で大家となり、総称して「白樺同人」あるいは「白樺派」と呼ばれています。

学習院は、明治10年(1877)に神田錦町で開学して以降、火災や地震によって、虎ノ門、四谷、目白とキャ

ンパスを移転します。白樺同人の多くは四谷キャンパスで学生生活を送っており、神田錦町と虎ノ門の校舎で学んだのは有島武郎ただひとりです。

明治20年(1887)に9歳で学習院予備科第3級(後の初等学科4年)へ編入した武郎は、横浜の実家を離れて寄宿舎へ入ります。この頃から『少国民』や『少年文学』等の少年雑誌を愛読するなど、文学に親しむようになったといいますから、彼の作家としての素地は、学習院での寄宿生活時代に育まれたのかもしれませんが。家族を離れ、ひとり寄宿生活を送る武郎のことを、実弟である有島生馬は「毎土曜日の午後、兄は寄宿から帰つて一泊した。(中略)日曜日には兄一人さきに夕食をすませ、人力で駅へ送られていった。われわれはそれを門まで見送り、もぎとられたように寂しかった。兄はしかし一度でも嫌な顔をみせなかつた」(有島生馬「思い出の我」、1976年9月、中央美術出版)



明治34年春季競漕会優勝チーム
明治34年(1901)4月15日 院史資料室提供



高等学科卒業前の記念写真
明治39年(1906)5月 院史資料室提供

と回想しています。

武郎をはじめとした白樺同人たちが在籍した四谷時代の学習院では、輔仁会活動が活発に行われていました。輔仁会というのは現在も存続している学習院の学生・教職員の交友組織で、当時は陸上部、水上部、編纂部、邦語(弁論)部等がありました。武者小路とともに輔仁会邦語部委員を務めた志賀は、文芸活動のみならず競漕(ボート競技)や陸上競技にも熱中し、明治34年(1901)の輔仁会主催の競漕大会では見事優勝、記念写真(左上)の中では前列の中央で片膝を立てて誇らしげに写っています。2度目の落第で武者小路や木下と同級になる前年のことです。

明治39年(1906)に撮影された高等学科卒業前の記念写真(右上)からは、同級生ならではの仲むつまじい様子が伝わってきます。前列左から2番目より志賀、白樺準会員として会計係をつとめた細川護立(細川護熙元首相の祖父)、木下、前列右端は武者小路で、背景にあるのは学習院の四谷校舎です。

美術・芸術を愛した白樺同人たち

彼らの中等学科時代に遡りましょう。

有島生馬や志賀直哉、武者小路実篤らが在学していた明治20年代後半から30年代にかけて、学習院の中等学科では選択制で洋画(西洋画)と日本画、ふたつの図画教育が行われていました。洋画を指導していたのは、松室重剛まつむろしげただという教師です。

白樺同人が授業の課題で描いたデッサン画を見ると、いずれも構図・遠近法等の技法がきちんと押さえられていることがよく分かります。どうして彼らはこんなに上手な絵を描くことができたのでしょうか。

その謎を解く鍵が、学習院中等学科図画授業風景写真(下)にあります。松室は、日本で最初の官立美術学校である工部美術学校で本格的に洋画を学んだ、いわば西洋図画教育の第一人者でした。教室の前方右側には児島喜久雄が描いた牛の石膏像が、前方左側には柳宗悦が描いたライオン像が置かれています。そして、注目すべきは教室の黒板です。黒板には、課題であるブロンズ像の馬を幾何学的に捉えた図が描かれ、腹の位置が全体の何分の一にあたるのか、胴体の半分がどの部分になるのか等を分割・図形化して考えるという



学習院中等学科図画授業風景 明治20年代後半～30年代(1900年前後) 院史資料室提供



有島生馬画 明治30年(1897)頃
個人蔵



志賀直哉画 明治32年(1899) 個人蔵



武者小路実篤画 明治32年(1899)
個人蔵



木下利玄画 明治32年(1899)
個人蔵



児島喜久雄画 明治36年(1903)
個人蔵



柳宗悦画 明治38年(1905) 個人蔵

西洋美術の手法を教えているのが分かります。

不思議なことに、画家になった生馬だけではなく、志賀、武者小路、里見弴など多くの白樺同人が好んで絵を描き、色紙や画集を残しています。志賀が数多く描いた自画像にしても、武者小路が好んで描いた野菜の絵にしても、基礎にあったのは中等学科時代に身につけたデッサン力でした。上手に描けたからこそ、彼らは美術・芸術に関心を持ち、文芸と美術の両面を持ち合わせた『白樺』を創刊、やがては美術展覧会を主催して、「白樺美術館設立構想」なる夢を持つようになったのではないのでしょうか。

さらに、松室と白樺同人たちとの交流は、学習院での授業内には留まらず、彼らはしばしば松室家を訪れては、松室が所有していた海外の美術書や雑誌を興味深く読んでいました。基礎をしっかりと学ばせるといふ学習院の教育方針、そして松室重剛という教師を通して、彼らは絵を描くことの楽しさを学び、海外の美術作品に触れたのです。のちに彼らが『白樺』を通して海外の美術を紹介し、生馬や柳、児島が芸術の道へ進んでいく影響をここに見ることができます。

日本人の美術観を形作った『白樺』

『白樺』は文芸雑誌であると同時に、毎号、海外の美術作品を写真図版や評論で紹介する美術雑誌でもありました。まだ自由に海外へ渡航することもままならず、ごく限られた者しか海外の情報に触れる機会がなかつ

た当時の日本において、『白樺』は外国を知るための手段だったのです。人々は『白樺』に掲載された写真図版を通して西洋美術に触れました。『白樺』が次々と紹介した海外の絵画や彫刻は、その後の日本人の美術観を決定づけます。モネ、セザンヌ、ゴッホ、ゴーギャン、いずれも私たちになじみの深い印象派・ポスト印象派の画家ですが、彼らを日本で紹介したのは『白樺』なのです。

『白樺』に掲載、紹介された版画の多くが、その後日本の美術館に収蔵されていること、ポスト印象派という呼称が定着するまで、白樺同人が訳した「後期印象派(後印象派)」という呼び方が長年使われてきたこと、そして何より、『白樺』が積極的に紹介したセザンヌやゴッホ、ロダンが今もなお日本で愛され続けていることから、『白樺』が日本人の美術に対する嗜好性に与えた影響は計り知れないものがあります。

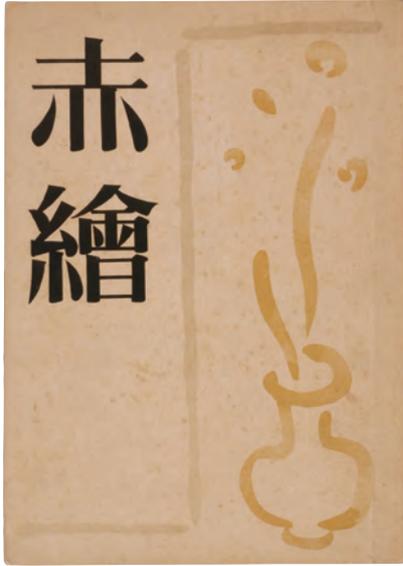
白樺同人が美術に関心を持つようになったきっかけが、学習院での図画授業にあるとすれば、日本人の印象派・ポスト印象派好きを形作った一因は学習院の教育方針が担ったといつて良いかもしれません。

『白樺』と三島由紀夫

『白樺』と白樺同人は学習院の学生たちにも大きな影響を与えました。

三島由紀夫(1925～1970)もそのひとりです。初等科入学から高等科卒業までの13年間を学習院で過ごした三島は、学習院の国語科教師清水文雄に

『赤繪』創刊号 昭和17年(1942)7月 個人蔵



『赤繪』第2号 昭和18年(1943)6月 個人蔵



才能を見出され、昭和16年(1941)清水の同人誌『文藝文化』に「花ざかりの森」を連載し、やがて作家となっていきます。ひとりの少年平岡公威が作家三島由紀夫になるために、手を差し伸べたのが学習院の教師清水だとすると、三島の背中を押したのは学習院の先輩である東文彦と徳川義恭でした。三島が東と徳川を誘って創刊した同人誌『赤繪』の名前は、志賀直哉の短篇小说「萬曆赤繪」から取られたと言われ(このことについては後ほど触れます)、三島は東への手紙の

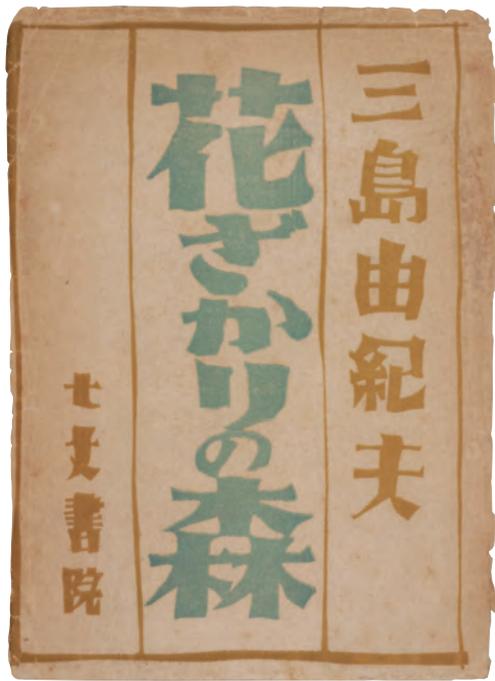
中で「かつて『白樺』がもち、又今『赤繪』がもたうとしてゐるお互の信頼も亦、かうしたゆたかな地盤に立つものであらうと存じます」(昭和18年3月24日付東文彦宛三島由紀夫書簡)、「『赤繪』は一つ学習院精神で貫きませうか。白樺的ならぬ学習院文芸精神だつてありさうなものですな」(昭和18年8月8日付東文彦宛三島由紀夫書簡)と、非常に『白樺』を意識した発言をしています。

東と徳川というかけがえのない文学の友を得た三島は、昭和17年(1942)7月に3人だけの同人誌『赤繪』を創刊します。三島は既に学習院の校友雑誌『輔仁会雑誌』でも作品を発表していましたが、彼の『赤繪』刊行に対する情熱には並々ならぬものがあり、東と徳川に送った手紙には、作品に対する批評から、表紙、カットに関するものまで隔々にわたり関心を寄せている様子が記されています。

さて、志賀直哉の「萬曆赤繪」から誌名を取ったと言われている同人誌『赤繪』に話を戻しましょう。「萬曆赤繪」と『赤繪』の関係を明らかにするため、いくつかの文献にあたりましたが、三島たちの同人誌の誌名が志賀直哉の小説から取られ



『赤繪』創刊号下絵(左)と原画(右) 個人蔵



三島由紀夫『花ざかりの森』 昭和19年(1944)10月
個人蔵



『花ざかりの森』見返し 個人蔵

たという確証を得ることができませんでした。確かに、『赤繪』創刊号の表紙に描かれているのは赤い花瓶ではありますが、この誌名命名については、志賀の「萬曆赤繪」から取ったとされる説のほかに、三島たちが焼き物としての万曆赤繪を好んでいたからという説もあったからです。ところが、東家のご遺族からお借りした『赤繪』創刊号の下絵と原画(前ページ左下)を見たとき、この疑問が解けました。

志賀直哉の「萬曆赤繪」は、万曆年間に作られた赤繪の焼き物に心惹かれる主人公の話で、冒頭「京都の博物館に一對になった萬曆の結構な花瓶がある。(中略)口の部分の中程がぼっかりと破れ、あとが漆つぎで赤く一線になって残っている」(志賀直哉「萬曆赤繪」、新潮文庫『灰色の月・萬曆赤繪』、1943年9月)と記されています。

左側の下絵に描かれた花瓶の首には、右側の原画、つまり刊行された『赤繪』創刊号にはない赤い一線があるではありませんか。やはり三島は『白樺』や白樺同人である志賀らの影響を受けていたのです。

三島由紀夫の未発表書簡

今回、当館常設展「学習院と文学 一雑誌『白樺』の生まれたところ」(会期:平成22年10月1日~12月

11日、会場:学習院大学史料館展示室)を開催するにあたり、資料の提供を学習院の同窓会組織である桜友会を通じて呼びかけたところ、多くの方々から反響が寄せられました。三島由紀夫の未発表書簡の存在を知ったのも、この呼びかけがきっかけでした。『赤繪』の同人仲間である東文彦のご遺族、そして『赤繪』の表紙や三島の処女作品集『花ざかりの森』を装幀した徳川義恭のご遺族の元に大切に保管されていた書簡や書籍、写真が「学習院と文学」展に出品されることになったのは、学習院同窓生の固い絆と、資料を大切に持ち続けた人々の思いによるものに他なりません。

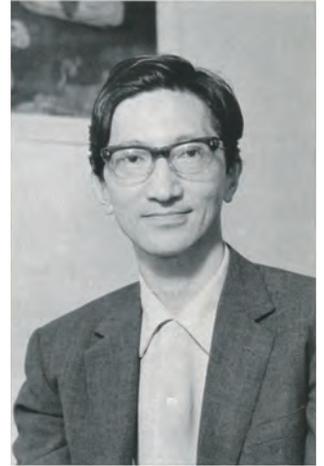
三島の未発表書簡のひとつに、『赤繪』第2号についての手紙があります。この中で三島は徳川が描いたカット絵について「(前略)平安朝の絵と『祈りの日記』のカット、どちらも大へんありがたいものでした。カットの方の雪(殊に垣根の)のなんともいへないふくよかな柔らかさ、あの滲み具合のあたゝかさ、まことに比類のないものですが、この感じ印刷にしましたらどの程度に出ますか。又東さんのお手紙ではカットは今度はなくていいのではないかといふやうなお話でしたが、今度の『赤繪』につかへずともこのカット頂戴しておいてよろしいでせうか。いつか本を出しでもするとき(そんなことがあるもんかと思ひますが、将来にあるかもしれ



『赤繪』第9号
昭和27年(1952)
個人蔵



『赤繪』第9号目次
個人蔵



福永武彦 昭和45年(1970)
院史資料室提供

ません。貴下はきつとお笑ひになるでせうが)これを是非つかひたいと存じます。(後略)」(昭和18年1月31日付徳川義恭宛三島由紀夫書簡)と書いています。そしてこの約束を果たすかのように、三島は初めての著書の装幀を徳川に依頼するのです。昭和19年(1944)10月に出版された『花ざかりの森』の見返し(前ページ右上)には、この書簡で記されているような雪の情景が描かれています。

吉村昭と『赤繪』

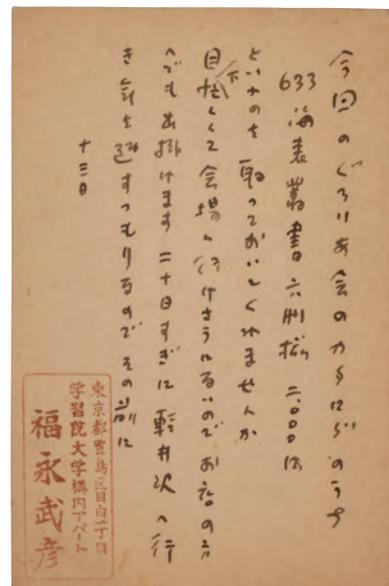
同人誌『赤繪』は、東文彦の死によって第2号で終刊します。かつて三島由紀夫も所属していた学習院の文芸部委員長になった吉村昭(1927~2006)は、昭和27年4月に発行する第8号の部誌名をそれまでの『学習院文芸』から『赤繪』に変えます。この誌名は、一説には吉村が東京国立博物館で見た絵付け陶磁器の万暦赤絵から取ったとされますが、吉村は敬愛する作家として志賀直哉と三島の名前を挙げており、誌名変更の際に三島だけではなく、東の実家まで赴いて誌名使用の諒解を得ていることを考えますと、吉村自身の中に『赤繪』継承の確かな意志があったと思われるなりません。ここに掲載した『赤繪』第9号の目次には、吉村の名前と並んで、後に結婚する作家津村節子(旧姓北原節子)の名前が載っています。

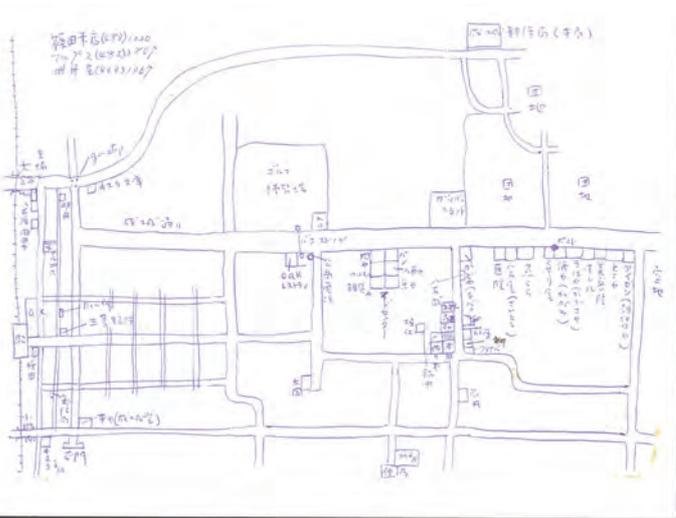
学習院大学教授としての 福永武彦と辻邦生

有島武郎、志賀直哉、武者小路実篤、里見弴、三島由紀夫、吉村昭、津村節子、学習院出身の彼らとともに忘れてならないのが、学習院で教えていた文学者の存在です。

『草の花』『風土』など透明度の高い作品で知られる作家福永武彦(1918~1979)は、昭和28年(1953)から昭和54年(1979)まで、学習院大学文学部フランス文学科(現フランス語圏文化学科)で教鞭をとって

福永武彦自筆書簡
大学史料館蔵
昭和34年(1959)12月14日消印

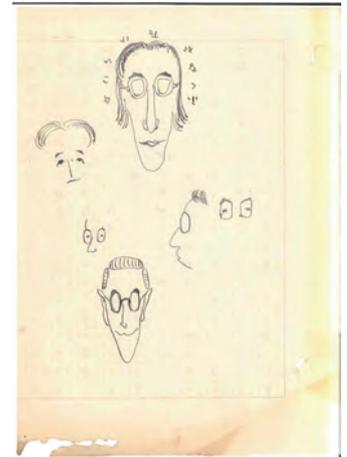




福永武彦自筆地図
昭和49年(1974) 個人蔵



辻邦生 昭和50年(1975)
院史資料室提供



辻邦生画フランス文学科教員の
似顔絵 1970年代 大学史料館蔵

いました。26年間に及ぶ在職の中で、一時期は学習院の宿舎にも居住しており、作家として作品を生み出す一方で、教え子との交流を持ち続けました。作品や写真から繊細で神経質そうな印象を持たれる福永ですが、実はたいへん心温かで、茶目っ気のある人でした。教え子が自分の暮らす成城学園へ引っ越してくると聞いた福永は、郵便局や病院、薬屋など生活に必要な情報を詳細に記した自筆の地図(上)を書き渡しています。また、福永は著書の口絵写真をしばしば学習院の構内で撮影しています。その一つ『加田侗太郎全集』では、現在は取り壊されてしまった西3号館の前でサングラスとトレンチコートを身につけ、ハードボイルドを気取っています。加田侗太郎というのは、探偵小説を書く際に福永が使っていたペンネームですが、実はこのペンネームは「誰だろうか(だれだろうか)」のアナグラムでした。もうひとつSF小説用に使っていたペンネーム船田学に至っては、なんと「福永だ(ふくながだ)」のアナグラム、こんなユーモラスな一面を持っていました。

『背教者ユリアヌス』『西行花伝』などの歴史小説をはじめ、数多くの多彩な作品を生み出した辻邦生(1925~1999)は、非常勤講師時代を含めると昭和31年(1956)から平成7年(1995)まで約40年のあいだ福永と同じフランス文学科で教鞭をとりました。既に

作家としての地位を確立した後も学生との交流を持ち続け、決して「教えること」を止めようとはしませんでした。同僚として福永と同時代を過ごした辻は、福永との交流を作品に書いているだけではなく、反故にした原稿用紙の裏面にフランス文学科の同僚の似顔絵とともに福永の顔を描いています。

福永も辻も、全20巻に及ぶ個人全集が刊行される作家です。両者に共通するのは、文学・美術・評論・童話・映画・演劇と多岐にわたる作品を生み出し、「教えること」にこだわり続けたということでした。

雑誌『白樺』の生まれたところ

このように学習院での学生生活は、白樺同人に大きな影響を与えていました。利害関係のない学生時代に出会った仲間だったからこそ、白樺同人たちは密接な関係と、親し過ぎるがゆえの仲違いを繰り返しながら、『白樺』を創刊し、生涯友情を保ち続けたのです。そして、雑誌『白樺』が生まれた学習院という土壌は、三島由紀夫をはじめとした後輩たちにとっても、感受性豊かな時代を過ごすのに最適な環境だったのではないのでしょうか。

(※文中の敬称は略させていただきます)